



## THINK DIFFERENT

수트는 언제나 불편할 뿐이라고요?

에디터는 1년 중 구두 신는 날이 손가락으로 꼽을 만큼 적지만 꼭 필요한 날이 있기에 구두를 사기로 결심했다. 조건은 단 세 가지. 단정한 디자인의 감성 구두일 것. 수트는 물론 데님과도 잘 어울릴 것. 내 월급에 납득이 되는 가격일 것. 이에 가장 먼저 떠올린 구두가 사진 속 처치스의 새넨 더비와 콘솔 옥스퍼드 슈즈다. 130년이 넘는 역사를 자랑하는 처치스는 영국 황실 인증을 받아 그 가치와 기술력을 인정받은 브랜드로 전통적인 영국 스타일

의 구두를 선보인다. 새넨과 콘솔은 처치스를 대표하는 모델로 오랜 시간 클래식한 디자인과 뛰어난 내구성으로 사랑받았다. 비가 자주 내리고 변덕스러운 날씨 탓에 영국의 구두 장인들은 내구성을 최우선으로 여겼고, 처치스의 구두 또한 특유의 투박함과 묵직함을 지녔다. 영국 구두 산업의 메카인 노스햄프턴에서 굿이어웰트 공법으로 제작한다. 콘솔 옥스퍼드 슈즈, 새넨 더비 슈즈 모두 가격미정 에디터 정진원

모토그래피 이종홍 / 처치스: 02-5208-5330





Veste, *Da/Da Diane*  
*Ducasse*, 595 €.  
Chemise, *G-Star*  
*Raw*, 120 €. Jean,  
*Polo Ralph Lauren*,  
249 €. Boucles  
d'oreilles, *Wwake*  
sur *Net-a-porter*,  
540 €. Chaussettes,  
*Burlington*, 19 €.  
Mocassins,  
*Church's*, 440 €.





Doudoune sans manches réversible en daim vieilli, costume en velours de coton, **Brunello Cucinelli**. Maille en cachemire, **Massimo Dutti**. Boots en daim vintage, **Church's**.





2. Chaussures "Grafton"  
en cuir, CHURCH'S.



*Ginevra et Edita : veste, chemise et jean, Boss,  
Mocassins Start Rite et Church's.*







#### STYLINGTIPP

Ist Glitzer alltags-  
tauglich? Unbedingt!  
Der Trick: gekonntes  
Down dressing. Heißt:  
zu dem üppig bestickten  
Bleistiftrock einfach ein  
Marineshirt und Loafer  
kombinieren. Dazu  
dezentes Make-up und  
eine locker zusam-  
mengebundene Frisur  
tragen. Und fertig ist der  
perfekte Office-Look!





CHURCH'S  
Brogues, 740 €



Made in UKのクラフツマンシップに学ぶ。

MARGARET HOWELL

CHURCH'S



**CHURCH'S**

老舗シューメーカーの再生、  
進化、そして変わらぬこと。

皮革製品・靴製造業の中心地、ノザンプトンで1873年に開業し、以来英国を代表する紳士靴を、昔とほとんど変わらぬ製法で作りに続けているチャーチ。250以上に及ぶ工程のほとんどが熟練の職人による手作業で進められ、革の切り出しから数えると、1足の靴が完成するまでに約8週間を要する。最盛期には3000軒以上も軒を連ねていた靴工場も、今では数えるほどになってしまった。そうした状況の中でも、チャーチはクラフツマンシップの伝統を守りながら、なおも新しいもの作りに挑戦している。

ブラダ社がチャーチを買収したのは、英国が誇る伝統工芸の技に強く惹かれたからだ。最初に着手したのは、クラシックなブレイントウのオックスフォードを、細身でエレガントに変身させること。トラディショナルなスタイルをベースに、工程や素材で妥協することなく、現代的なシェイプやデザインを取り込むことで、「ノザンプトン・シューズ」に新たな息吹を吹き込んだ。ブローグにトリブルソールを取り入れ、モンクストラップにダブルのパツクルを施し、ブレイントウにスタツズを打ち込むなど。あくまでもチャーチの伝統を踏襲しながら、ラグジュアリーブランドのDNAを取り込む柔軟性が、まったく新しい世代の紳士靴を生み出しているのだ。

「守りたいのはイギリス伝統のクラフツマンシップであり、変えていき

photo/ Kevin Sparks text/ Yumi Hasegawa

166



- 1 ワックスがけの腕を買われて引き抜かれた、責任者のキャロルさん。
- 2 スイスやドイツから、生後9ヶ月の仔牛の最高級タンレザーを輸入。
- 3 靴の型紙である「ナイフ」で、パーツを1枚ずつ革からくりぬく。
- 4 アッパーに裏地を縫い合わせる工程は、勤続27年のベテランが担当。
- 5 蒸気を当てて革を延ばし、踵部分を成形する、特別なマシン。
- 6 綿の枠を施すことで、本体から靴底を剥がして修理しやすくする。
- 7 コルクの柔軟性を活かし、グッドイヤーウェルトが足型を記憶する。
- 8 ソールの縫い目にワックスを施し、ハンドメイドらしい風合いを。
- 9 フィニッシングのクリームを塗ることで、個性や表情が生まれる。



以前は別の工場が入っていたという。1950年代の面影を残す外観が印象的。

たいのは時代に合ったスタイル。というシューメーカーが、いちばん大切にしているのが、ブランドの財産ともいえる職人たち。親子3代にわたって工場に勤務している家族もいれば、勤続50年以上の女性もいる。下描きもなくアッパー部分をミシンで縫っていく熟練の技、飾りステッチを入れるために1902年製の機械を使いこなすスキル、サイズやスタイルナンバーをライニングに書き込む緻密な作業など、無駄なく工程は進んでいく。グッドイヤーウェルトに欠かせないコルクをソールに塗り込む工程も、仕上がりの風合いを左右するワックスがけも、そのすべてが人の手によるものだ。最高級ラインのクラウン・コレクションに使うハンドステッチ糸に至っては、綿糸に蜜蝋を塗り重ねて手作りされる。ノーザンプトンの他工場ではほとんど外注してしまう作業だが、専門の職人を擁する。質実剛健な靴の街にあって、伝統を継承しつつ進化を遂げるファクトリーの代表格となっている。



# Church's

靴の左右を初めて作り分けた1837年創業の老舗英国靴

上から、定番のローファーに登場した待望のMETバージョン。いまやチャーチの新しい代表作となったスタッズでデコレーションした新作。「ペンブリー MET」ウィメンズ・ローファー¥63,000 シンプルな9ホールレースアップブーツはアスファルトと名付けられた上品なグレイッシュカラー。「アレクサンドラ」ウィメンズ・ブーツ¥74,000 ブランドを代表するモデルにブラック、タバコ、エボニーの3色を組み合わせたシックなトリコロールカラーの新作。「グラフトン」メンズ・ブローグシューズ¥92,000 同じく代表作であるダービーシューズのラストを使った新しいデザイン。ぼつりとしたフォルムに細いストラップが絶妙なバランス。「レクサム」メンズ・ワンストラップシューズ¥79,000 /すべてチャーチ(チャーチ表参道店 ☎03-3486-1801)





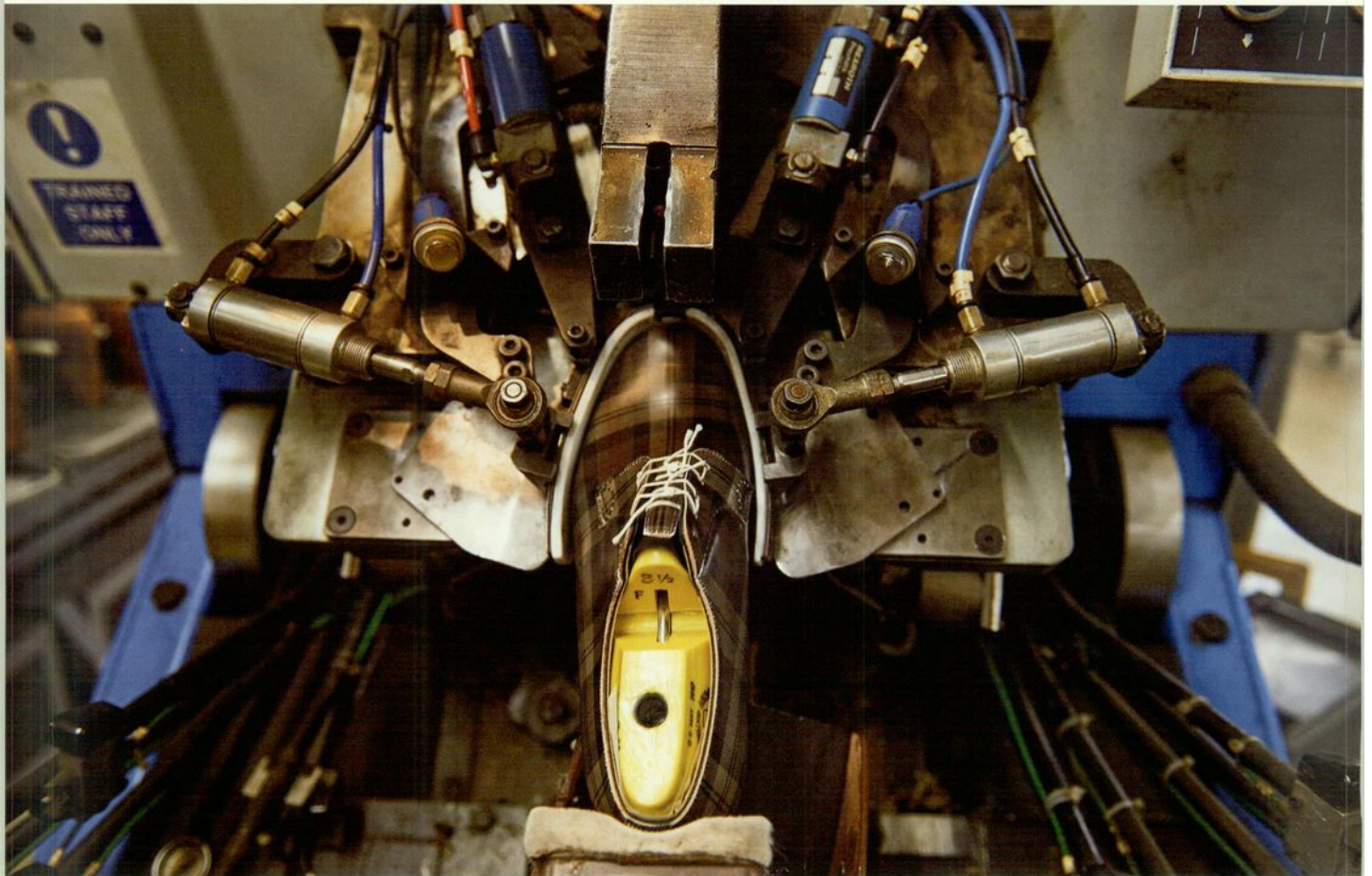
## CHURCH'S

チャーチの靴には、1837年の創業以来、イギリス・ノーザンプトンで培ってきた技術力とブラダグループがもたらしたモードブランドとしてのデザイン力という、伝統と革新が息づいている。そのためトラディショナルからラグジュアリーまでさまざまなスタイルに合わせやすい。ローファー ¥75,000、ウィングチップ ¥92,000 (2点ともチャーチ/チャーチ 表参道店 ☎03-3486-1801)

“センスを雄弁に語る頑固な靴”







## BRIT SHOES

いざ! ノーザンプトンへ

### 英国靴「チャーチ」のファクトリーに潜入取材!!

洋服は、Made in Italyが主流になった。

が、僕らの足元については、Made in Englandがいまもベストだ、ということは変わっていない。

英国靴が世界を魅了する理由はなにか? その答えを探るチャーチの工場取材リポート。

Photos: Michiyo Yanagihara Coordination: Aiko Yanagida Words: Noriaki Moriguchi @ GQ

ロンドン・ユーストン駅から電車で約1時間。いくつもの靴工場があるノーザンプトンの、チャーチの工場へ到着するなりトイレを借りた。掃除の行き届いたトイレはラグジュアリーではないものの、人への気遣いを感じる。ここはきつといい工場だ、と想像した。

そして、いざ工場内部へ……と思いきや、控え室に職人がやってきて、まずはチャーチを象徴するモデルである「シャノン」の伝統的ハンドステッチを披露してくれた。ホールカット(一枚革)の外羽根の、根元の部分を



D形に鮮やかに手縫いする。かつては馬具用のレザーだったという厚手のタフなレザーを使用するゆえ、強度のあるヘンプ糸を自社開発したんだよ、と職人が誇らしげに言う。「シャノン」に、特別に惹きつけられるのは、ほっこりするこの手縫いのディテールが2018年のいまでも存在するからかな、とまずは思った。

工場の内部へ進むと、約20カ所のタンナーから集めたという「革」部屋に到着。ここを管理しているケヴィンさんが1枚1枚チェックし、規定に達しないB品はタンナーに返



ロンドンに来たら、チャーチはここで買え

ロンドンにはチャーチの店舗が7つあるが、せっかくならば紳士の聖地ジャーマンストリート店へ。ポー・ブランメル像があるこの通りのお店には、日本では買えない珍しいモデルもちらほら存在。

●110 Jermyn St, St. James's, London

却する。牛革であれば1頭から、4から5足ほど作られるという。

続いて、ブローギング(飾り穴開け)やスキの作業、縫い付けコーナーを見学。表革とライニングがべろーんとなった生まれたてのアップパーを、目安のマークを入れることもなく、ダダダダッとマシンで瞬時に縫う職人の高度な技術に圧倒された。次に驚いたのが、サウナルーム。アップパーを湿度80%のなかで24時間寝かせる。革は水分を含んでいると割れにくくなるからだ。そしてこれはまた、この後、熱で革を伸ばして、伸びた





## POP-UP STORE

伊勢丹で、チャーチの限定モデルが発売に

9月19日から25日まで、伊勢丹 新宿店メンズ館地下1階でポップアップストアがオープンするという情報をキャッチ。人気モデル「シャノン」のタータンチェックバージョンが登場するほか、クラシックモデルの受注限定販売も!



後に収縮する次の工程を経るためのステップだという。何気に履いている革靴に、こんな隠れた工程があったのか!

お次はメインの釣り込み。チャーチでは、木型に釘を打って1週間寝かせたりはしない。油分を出し切り、水分漲る状態で、高熱のもと30秒で一気に入形作り、50秒で冷やして固める。ここで決め手になるのは、職人が自分の手で革をひっぱったときの感覚。一瞬の勝負が求められるのだ。

ウェルト(細革)とインソールでアップパーを挟み込むグッドイヤーウェルト製法(機械)

を見たあと、ミドルソールのコルク詰めを見てまた驚いた。かかと部分は粗めの強いコルクを、足の前側はより柔軟なコルクを、とコルクの種類を変えていた。その後、サンドペーパーをかけたり、カラーリングしたり、クリームを塗ったりと、仕上げだけで50工程ほどあった。全部で、平均250から270の工程を経る。作っても作っても足りないチャーチの靴は、各部門のいたって真剣だった職人による技術と、ときおりのハンド技と、イギリス人の真面目な気質によって完成されていた。

1. 「シャノン」の手縫い作業。2. 見た目よく羽根部分を縫い合わせる。まっすぐよりアーチ状にするほうが強度が増すため、D形に縫われる。3. 整理して置かれたレザー。4. 飾り穴用のパンチング。ダイヤモンド柄など細かさを極めるものは手押しが基本。5. アッパーは、2重線を引くように2本、ミシンでステッチされる。6. 工場風景。7. たっぷりと水分を含ませるサウナ。8. ラストは廃棄せずすべてストック。古いもので1971年からある。9. ソール内には、強度的にも重要なステンレスのパーツが。10. コルクを詰める工程。11. 余分なウェルトをトリミングしながらアウトソールを縫い付ける。12. 磨きにも命をかける。



Vintage suede boots by Church's.



GRAN BRETAGNA - ANOTHER MAN - CHURCH'S - 01.10.18





## Prada

Grey overprint wool jacket, £1,625; white/pale blue striped cotton-poplin shirt, £735; brown cashmere turtleneck, £670; navy/black wool trousers, £1,205, all by Prada. Black leather boots, £425, by Church's





Giorgio Armani wool/cotton-drill coat with sheepskin sleeves and collar, £4,100, double cashmere bomber jacket (just seen), £3,000, and wool trousers, £680. John Smedley Sea Island cotton Hatfield jumper, £140. Church's leather Wrexham shoes, £450

Norman Cherner for Cherner Chair Company walnut stool, £780 at The Conran Shop



GQ AWARDS 2018

Suit, £3,580. Shirt, £540. Bow tie, £165. Pocket square, £125. All by **Tom Ford**. tomford.co.uk. Shoes by **Church's**, £245. church-footwear.com. Socks by **Budd Shirtmakers**, £20. buddshirts.co.uk





*Al wears red, black and beige heavy wool check suit and cherry wool V-neck by GUCCI; bronze velour hat by REINHARD PLANK; black calf leather Amberley boots by CHURCH'S; stone wool socks by GLENMUIR from sockshop.co.uk*

**Groomer** Kota Suizu at Caren  
**Model** Al Gill at Elite Model Management  
**Photo Assistant** Jessica Ellis  
**Retouch Studio** RM  
**Production** KO Productions  
**Casting** Shelley Durkan  
**Casting at** Bryant Artists  
**Location** Dovestone Holiday Park  
**With thanks to** Overfinch







Giacca **LANVIN**,  
camicia e cravatta **DIOR**  
**HOMME**, pantaloni  
**HERMÈS**, stivali  
**CHURCH'S**.

Nella pagina  
a fianco, dall'alto:  
soprabito **SANTONI**

**EDITED BY**  
**MARCO ZANINI**,  
camicia **BOSS**,  
pantaloni **BERWICH**,  
stivali **MORESCHI**;  
caban **SANDRO**,  
abito **BARBATI**,  
camicia **CORNELIANI**,  
cravatta **E. MARINELLA**;  
soprabito  
**HARMONT & BLAINE**,  
camicia **ERMENEGILDO**  
**ZEGNA**, cravatta  
**E. MARINELLA**





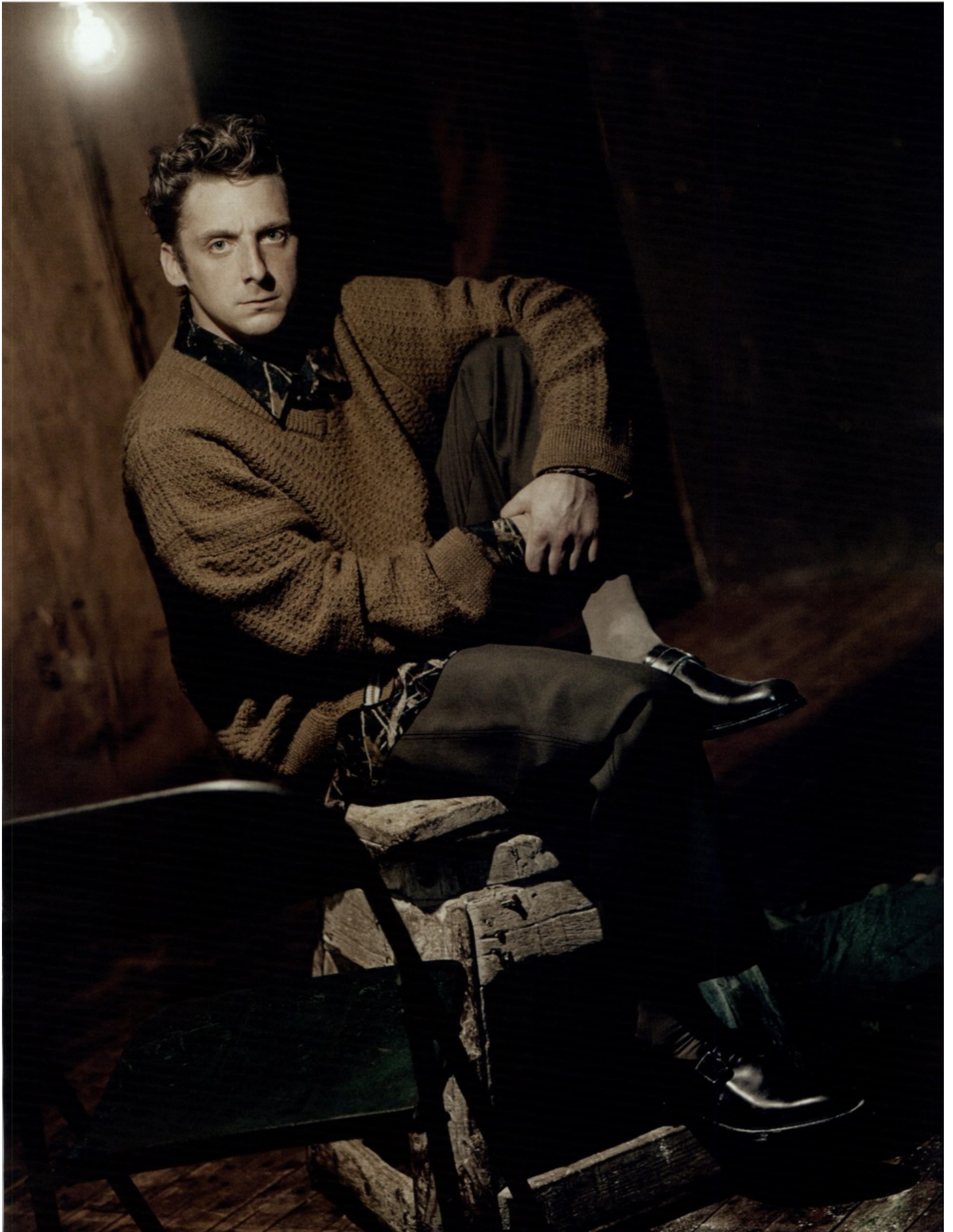
Borsa in pelle  
di vitello ZANELLATO  
750 euro,  
stivaletti in  
vitello CHURCH'S  
620 euro.

www.zanellato.com  
www.churchs.it

IO DONNA 2 OTTOBRE 2018

THOMAS STRAUB









Trenchcoat, ca kr 23 500.  
Vest, ca kr 16 500.  
Bogge fra Calvin Klein.  
Sokker fra Maria Rosa.  
Sko fra Church, kr 4800.





Grijze gecoate wollen jas met ruit  
Ports 1961 € 1785  
Zwarte mohair croptop p.o.a.,  
wijdvallende pantalon van viscose  
€ 600 beide 3.1 Phillip Lim  
Zwarte kalfsleren brogues *Shannon*  
Church's





**BOSS**, traje gris de tres piezas (1.095 €). **OLIMPO**, camisa de vestir de algodón (90 €).  
**HERMÈS**, pajarita estampada "Get Lucky!" en seda (145 €). **HUGO**, pañuelo blanco (25 €).  
**CHURCH'S**, zapatos con doble hebilla (490 €).





en esta página\_ LOEWE, bolsa con manta y cantimplora Feder Bag Pecan Color (1.500 €), CHURCH'S, mocasines en cuero color borgoña (550 €).  
página anterior\_ CALVIN KLEIN 205W39NYC, camisa vaquera en tono verde menta (c. p. v.).



# SIN CALZADOR

Los zapatos ingleses tienen justa fama, en parte, gracias a los que Church's lleva siglo y medio fabricando. Visitamos su sede y de paso nos enamoramos del proceso



**AL SERVICIO DE SU MAJESTAD** El exterior de la fábrica Church's en Northampton, donde todavía hoy se fabrican todos los zapatos de la casa, sigue igual que cuando la visitó la Reina en 1965. Algunas habitaciones, con sus paneles de madera, podrían haber sido usados como decorado para *The crown*. Solo que el nombre Church's, registrado en 1873, es más antiguo que la casa Windsor. Jorge V lo acuñó en 1917.

**GUSTOS, COLORES** Church's fabrica modelos audaces, como el Pembrey en verde (izda.), y tranquilos, como el Thickwood, de cordones.



En la fábrica de Church's, un equipo revisa hasta la esquizofrenia cada pieza de piel antes de que esta pase a la cadena de montaje que la convertirá en un par de zapatos. Si tiene el menor defecto, se devuelve, otros fabricantes menos mirados se quedarán con ella. Este es solo uno de los procesos prácticamente increíbles que ocurren en esta factoría inglesa, para empezar, porque no los llevan a cabo ordenadores sino seres humanos. Con la precisión de su pulso y de su experiencia.

La piel se corta a mano en la *clicking room* (clic, por el sonido que hace el escarpelo al introducirse y desengancharse de la piel). Después se prepara y, si el modelo de zapato lo exige, se horada mediante el *broguing*, algo que no tiene nada que ver con el baile y que por supuesto se hace mejor con máquinas viejas. Finalmente se cosen las piezas, un trabajo que, en palabras de una de las artesanas, no consiste más que en "coordinar los ojos y las





manos". Cada par de zapatos Church's requiere unos 250 pasos y, por tanto, 250 pares de manos, antes de llegar a la tienda. Algo que se mantiene prácticamente igual que en 1873, cuando Thomas Church y sus tres hijos fundaron su fábrica en Northampton, a 100 kilómetros de Londres. La edición de 1878 de la guía de viaje Murray's describía así la ciudad: "Quien visite Northampton se dará cuenta, por los delantales de cuero y las caras sucias, que está en la tierra de los zapateros". Hoy todo está más limpio y quedan muchos menos que en el siglo XIX, pero los que subsisten han pasado a formar parte de la industria del lujo. Desde 1999, Church's forma parte del grupo italiano Prada. Una relación que ha convertido la firma inglesa en la única que fabrica calzado clásico artesanal, pero sin miedo a las temporadas de moda: uno puede hacerse con unos eternos Wrexham (un *monkstrap* con hebilla gruesa), pero si tiene el día valiente, también tiene el mocasín Pembrey con tachuelas



**CADA PAR DE ZAPATOS CHURCH'S REQUIERE 250 PASOS Y, POR TANTO, 250 PARES DE MANOS ANTES DE LLEGAR A SUS TIENDAS. LA PRIMERA SE ABRIÓ EN 1921**

en el empeine o en ante verde. Prada vigila que el coqueteo de los ingleses con la moda sea como tiene que ser, claro.

Tal vez lo más característico del trabajo manual que se lleva a cabo en Northampton (aparte del mero hecho de que sea manual y ocurra en Europa, y no en algún país emergente con sueldos más bajos) es que la tarea se convierte en la labor de un autor. Al final del proceso de cada par de zapatos, se lima el interior del tacón derecho, para que no se enganche con el pantalón (lo que llaman *gentleman's corner*). Por último, toca "acabar" las suelas. Se barnizan de un color en concreto. Se marca el perfil con una cenefa. ¿Qué utilidad tiene?, le pregunto al operario, y responde: "Ninguna. ¡Pero es que, si no, quedan muy aburridas!". DANIEL GARCÍA

1. La sede de Church's, en Northampton. Esta fábrica se inauguró en 1957.
2. Un artesano asegura la 'stretching crown' en la costura del talón de un zapato.
3. El cuerpo del calzado pasa entre uno y tres días en el humidificador, para hidratar la piel.